

英語コーパス学会 第 35 回大会資料

日時：2010 年 4 月 24 日（土）午後 1 時より（正午受付開始）

会場：兵庫県立大学（神戸学園都市キャンパス）

（<http://www.u-hyogo.ac.jp/>）

〒651-2197 神戸市西区学園西町 8 丁目 2-1

第 35 回大会プログラム

ワークショップ《Web コーパス検索ツール Sketch Engine の基本操作と活用》

会 場：教育棟 III PC3 教室

時 間：10:00～11:45 (9:30 受付開始)

講 師：投野由紀夫 (東京外国語大学)

定 員：定員 50 名 (先着順・要予約)

参加費：会員無料・非会員 1,000 円 (予約申し込みは郵送・電子メール (今回はnaga.inoue@gmail.com) で事務局まで)

日 時 2010 年 4 月 24 日 (土)
会 場 兵庫県立大学 (神戸学園都市キャンパス)
受付開始 12:00 (教育棟 II 101 教室前)
開 会 式 13:00 (教育棟 II 101 教室)

1. 会長挨拶
2. 開催校挨拶
3. 総会
4. 事務局からの連絡

司 会 井上永幸 (徳島大学)
赤野一郎 (京都外国語大学)
濱田道夫 (兵庫県立大経済学部長)

〈研究発表第 1 室 (教育棟 II : 104 教室)〉

研究発表 1 13:40-14:10

no doubt の機能について 一類義表現との比較から一

司 会 五百蔵高浩 (高知女子大学)

鈴木大介 (京都大学大学院生)

研究発表 2 14:15-14:45

古英語・中英語に現れる小節・結果構文 一通時的英語コーパス YCOE と PPCME2 を検索して一
神谷昌明 (豊田工業高等専門学校)

〈研究発表第 2 室 (教育棟 II : 105 教室)〉

研究発表 1 13:40-14:10

コーパスを応用した言語テスト問題の改良 一日本の大学入試問題から文法 4 択問題を例に一
宇佐美裕子 (ランカスター大学大学院生)

司 会 阿部真理子 (高崎経済大学)

研究発表 2 14:15-14:45

日本語母語英語学習者の連語表現の判別分析

石田知美 (名古屋大学大学院生)

杉浦正利 (名古屋大学)

〈休 憩 14:45-14:50〉

招待講演 14:50-15:50 (教育棟 II 101 教室)

コーパス検索で注意すべきこと 一基礎データの信頼性向上のために一

司 会 山崎俊次 (大東文化大学)

大名 力 (名古屋大学)

〈休 憩 15:50-16:10〉

シンポジウム 16:10-18:10 (教育棟 II 101 教室)

《進化する Web コーパス：現状と課題》

Web コーパス概観

Web コーパスの言語情報処理基盤

Web コーパス研究におけるブログの可能性とその文体的特徴

小学館 Web コーパス “Sekai Corpus” 構築とその活用

司 会 投野由紀夫 (東京外国語大学)

講 師 田中省作 (立命館大学)

講 師 大羽 良 (中央大学)

講 師 中村隆宏 (ネットアドバンス SE)

星野 守 (小学館コミュニケーション編集局)

閉会の辞

瀬良晴子 (兵庫県立大学)

《懇親会 時間：18:30-20:30 場所：大学会館内生協食堂 会費：4,000 円》

【ワークショップ】

Web コーパス検索ツール Sketch Engine の基本操作と活用

投野由紀夫（東京外国語大学）

本ワークショップでは、世界的に注目を集めている web コーパス検索ツール Sketch Engine の概要と基本操作を紹介し、目的に応じた活用方法をわかりやすく紹介する。Sketch Engine は Adam Kilgarriff 氏が開発した web コーパス構築・検索システムで、個人が比較的簡単に web コーパスを利用できる環境を提供するものである。急速なインターネット技術の進歩により、web 上の膨大なテキスト資源をコーパスとして利用できる環境が整備されてきたことを受け、Sketch Engine では商用アカウントを取得した利用者に対して、多言語 web コーパスの利用、web コーパスを自作する環境の提供、自己保有のコーパスを Sketch Engine にアップロードするサービスなどを提供している。これらを組み合わせることで、誰でも比較的安価に大規模コーパスが利用可能になる。

また Sketch Engine には他のコーパス検索ソフトにない独自の分析ツールが実装されている。その最たるものが Word Sketch 機能である。単語の振る舞いに関して、文法関係をもとにコロケーションを一覧表にして表示する機能は、他に類を見ない。またそれをもとにした類語の抽出や学習用例文抽出機能なども非常に興味深い。

本ワークショップでは、Sketch Engine の豊富な機能の中から、基礎的なコーパス検索方法の紹介および自作コーパスの作成を中心に実習を行う。主な内容は以下の通り：

- 1) 実装済みの web コーパスの概要紹介
- 2) コーパス検索の実際（演習）
 - a) Concordance：一般的な語句検索から高度な CQL を利用した検索まで。
 - b) Word List：種々の語彙リスト作成インタフェース。
 - c) Word Sketch：語の文法関係の一覧表を自動生成。
 - d) Thesaurus：文法関係の似たもの同士を類義語として自動判定。
 - e) Sketch-Diff：2つの語のコロケーション分布の違いを自動比較。
- 3) 自作コーパスの作成（演習）
 - a) 自分でデータをアップする方法。
 - b) BootCat を利用して web から収集する方法。
- 4) SkE の活用事例（スライド）

英語コーパス学会員が関心を持ちそうな SkE の活用方法をスライドで紹介する。

【研究発表第 1 室】

【研究発表 1】

no doubt の機能について—類義表現との比較から—

鈴木大介（京都大学大学院生）

本研究では、英語の文副詞である *no doubt* について、実際の生起環境に基づき、その語用論的特性を明らかにする。先行研究では、*no doubt* の蓋然性・確信度といった意味分析だけでなく、談話標識としての *no doubt* も指摘されている (Simon-Vandenberg and Aijmer 2007)。しかし、依然としてコミュニケーションや談話の観点からの分析が不十分と言える状況にある。そこで、コーパスを用いて、*no doubt* の実際のパターンを示し、同じ意味範疇に属する類義の *doubtless*, *undoubtedly* と比較することで、その機能を明確にしていく。

BYU-BNC から、*no doubt*, *doubtless*, *undoubtedly* について、それぞれ全 2382, 844, 2343 例が検索でき、文副詞として生起しているものを抽出していくと、各 103, 841, 2187 例が得られた。本研究では、これをサンプルとして、「談話構造」、「モダリティ」という 2 つの側面から分析を進めていく。最初に、「談話構造」の観点から、談話内の結束性を考え、前後のメッセージのつながりの関係を明確に表す指標に着目する。変数として、(i) 三表現が節のどの位置に生起しているのか、(ii) それぞれの節の主語が、代

名詞であるかどうか、(iii) それぞれの節頭に談話標識が生起しているかどうかを調べていく。次に、「モダリティ」の観点から、話者の心的態度を明確に表す指標に着目し、各表現が生起する節内において、(i) 法助動詞、(ii) 法副詞、(iii) 評言節 (*I'm sure, I suppose, it seems, ...*) と、どのくらいの頻度で共起しているのかを調査していく。

結果として、まず、*doubtless, undoubtedly* は節中に生起している割合が高い一方で、*no doubt* は、節頭の割合が非常に高く、語順と機能の関係から、談話機能を担いやすいと言える。次に、代名詞の点であるが、他の二表現と比べて、*no doubt* の節では、代名詞が主語となる割合が高いことが統計的に明らかとなり、談話の流れの中で、*no doubt* が生起しやすいと言える。最後に、談話標識との共起割合であるが、三表現の中では、*no doubt* が一番高い頻度で共起する結果となった。観点を移して、心的態度を表す表現との共起については、*doubtless* が他と比べて、共起する割合が統計的に高いとわかった。

以上のように、意味領域では、*certainty, probability* を表し、*doubtless, undoubtedly* と類義であるが、談話語用論レベルにおいては、担う機能の種類に差異が見られた。すなわち、*doubtless* がモーダル機能を担う傾向にあるのに対し、*no doubt* は談話機能の傾向が強いと考えられる。

【研究発表 2】

古英語・中英語に現れる小節・結果構文 —通時的英語コーパス YCOE と PPCME2 を検索して—

神谷昌明 (豊田工業高等専門学校)

結果構文 (resultative construction) に関する研究は Washio (1997: *Resultatives, compositionality and language variation*), 小野 (2007: 『結果構文研究の新視点』) などに見られるように共時的なレベルでの研究が多数を占める。現代英語においては、結果構文は (1) のような動詞自体が状態変化を表し結果述語はその意味を具体的に詳述する「本来の結果構文」と、(2) のような動詞自体は状態の変化を表さないが結果述語が状態の変化を表す「派生的結果構文」の 2 つに大別される。

- (1) He broke the vase *into pieces*.
- (2) He pushed the door *open*.

結果構文は歴史的に見れば古英語 (OE) の動詞接頭辞構文 (小辞構文) や中英語 (ME) 期に生産的になった句動詞 (phrasal verb) 構文と大いに関連があると言われている。残念ながら OE, ME に現れる英語の結果構文の具体例を提示した先行研究は少ない。

Visser (1967) は OE では結果構文を形成する動詞を 5 例 (*awæscan (wash), bindan* 等), 結果述語 (resultative predicative adjunct) を 4 例 (*clæne, smale* 等) 挙げている。ME では 17 の動詞 (*beaten, bürsten, chewen, choppen, dyen* 等) を挙げ、結果述語を 12 例 (*small, green, blue, bare, open* 等) 挙げているが、結果構文 (の成立過程など) を研究する上で用例数が少ないと言える。

- (3) OE: *awæsc [hit] swide clæne (wash it very clean)*
- (4) ME: There came a wind and *brast* the doores *ope*.

本発表の主旨は、結果構文の成立過程 (史的発達) を探る通時的研究へ繋げるための準備段階 (中間報告) として、OE, ME に現れる結果構文の具体例を挙げ、結果構文を効率的に導き出すための通時的コーパスを紹介することである。

OE, ME に同じコーパスデザインで文法標識 (統語標識・品詞タグ) が付与された 2 つのコーパス、[1] BROOKLYN (古英語) の拡張版である the York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE; 古英語)、[2] the Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English Second Edition (PPCME2; 中英語) を取り上げ、コーパスの特徴を紹介する。そして、2 つのコーパスを利用して、OE, ME において具体例の少ない結果構文を導き出し、先行研究の記述に用例を追加し、今後の結果構文 (の通時的) 研究の基礎資料とする。

検索方法は結果構文を含む小節 (small clause) を表わす統語標識 [IP-SMC] をキーワードとして小節のコンコーダンスを作成し、その中から手作業で結果構文を抽出する。小節の中から単なる「命名・任命」を表す第 V 文型 (e.g. *They call him Andy.*) であるのか結果構文であるのか自動的に判断することは困難で

あり多くの時間を要した。

19 の作品を分析した結果、比喩的表現などを含めて 32 例の結果構文の用例を導き出すことができた。Visser (1967) は中英語期で結果構文を作る動詞を 17 例挙げているが、新たに 12 の動詞 (*baken, striken, schitten* 等) を追加することができた。但し、*He broke it into pieces* のような結果構文を検索することは困難であることを指摘したい。

【研究発表第 2 室】

【研究発表 1】

コーパスを応用した言語テスト問題の改良 —日本の大学入試問題から文法 4 択問題を例に—

宇佐美裕子 (ランカスター大学大学院生)

コーパスは従来、辞書、語彙リスト、文法書の作成やその改良のため、主に語彙や文法を記述するために使用されてきた。しかし、コーパス言語学は一種の methodology であるという考えのもと (McEnery and Wilson 2001, Hunston 2002), コーパスを基にした語彙・文法記述は近年、談話分析、文体論など言語学のさまざまな分野に応用されている。言語教育もその一つで、教材作成、computer-assisted language learning (CALL) や data-driven learning (DDL) の分野に応用されている。最近では言語テストの分野にも応用されてきているが、この分野へのコーパスの応用は比較的新しく、一般コーパスや学習者コーパスはテスト作成や採点などあらゆる方法に応用されるべきだと主張されているにも関わらず (Alderson 1996), その枠組みは完全には構築されていない。

しかし、ごく最近、コーパスを言語テストへ応用した研究がいくつか見られるようになってきている。その一例として、Educational Testing Service (ETS) や Cambridge ESOL は、独自のコーパスを構築し、そのコーパスを基にテストを作成し、評価し始めている (e.g. Biber et al. 2004, Barker 2005)。しかし、日本の大学入試問題は信頼性 (reliability) や妥当性 (validity) の点で問題のあるアイテムを含んでいると批判されてきている (e.g. Brown 1996, Watkins et al. 1997) にも関わらず、コーパスの言語テスト作成への応用に関する研究は多くはない。

従って、本発表では、2002 年から 2007 年に出題された私立大学入試問題とセンター試験の問題の文法空所補充 4 択問題の中から、比較的多く出題され、日本人学習者の多様なエラーが見られるイディオム *in spite of* を例にあげ、stem (問題文) に *in spite of* が使用されている 4 択問題において、*in spite of* が大学入試問題の stem に使用されている文脈と、一般コーパス British National Corpus に現れている文脈の違いを指摘し、British National Corpus に現れるコロケーションを応用した新しい stem を提示する。さらに、*in spite of* の全体が空所になっている 4 択問題の錯乱詞において、大学入試問題に使用されている錯乱詞と、学習者コーパス Longman Learner Corpus に見られる日本人学習者の *in spite of* に関するエラーの違いを指摘し、学習者のエラーを応用した新しい錯乱詞を提示する。

【研究発表 2】

日本語母語英語学習者の連語表現の判別分析

石田知美 (名古屋大学大学院生)

杉浦正利 (名古屋大学)

本研究は、2 語以上の連語表現を分析対象とし、日本人英語学習者と英語母語話者のコーパスデータを判別分析を行うことで、どのような連語表現が学習者と母語話者の言語的特徴の差異に寄与しているかを調べることを目的とする。

英語学習者の中間言語研究における n-gram 表現の分析は、限定された gram 数における母語話者との比較分析が主であった (De Cock 2000, Milton 1998)。また、連語表現の分析は、エッセイのトピックに使われる表現に強い影響を受けるという問題点があるが、これまでの研究では、そのままトピック依存の連語表現を含んだまま分析する (De Cock 2000) か、または主観的にトピック依存表現を削除する (Milton

1998) といった対処がなされるに留まっている。

日本人英語学習者コーパス NICE (Nagoya Interlanguage Corpus of English) では、11 のテーマからひとつを選びエッセイを書いているが、“school education” のように複数語からなるテーマの場合、テーマの表現自体が連語表現として頻出するため、一語のみのテーマ (7 種類) に関するエッセイのみを分析対象とすることにした。その結果、学習者データ 125 エッセイ (総語数 42505 語) が対象となり、それと比較するため、学習者コーパスと同じ条件で書かれ、同じく一語のみのテーマで書かれたアメリカ英語を母語とする母語話者データのうちランダムに 70 エッセイ (総語数 42,493 語) を選び、学習者データと母語話者データにおける連語表現を抽出し、総数 (token) と異なり数 (type) を調べ、Guiraud Index (GI) を算出し比較した。その結果、母語話者データでは最長 8-gram であつたのに対し、学習者は 20-gram までの非常に長い表現を使用していたことが分かった。

このようにして得られた、各エッセイにおける連語表現の総数 (token)、異なり数 (type) および Guiraud Index (GI) を変数としてステップワイズ法の判別分析を行い、どの変数が学習者と母語話者とを判別する要因になるかを検証した。

各 gram 数における判別分析の結果、2-gram では総数・異なり数・GI の 3 変数とも判別に寄与するが、3-gram から 5-gram は総数のみ、そして 6-gram から 8-gram までは GI のみが、母語話者との判別に寄与する言語的特徴であることが分かった。

次に、学習者が連なりの長い表現を使用するという上記の観察結果を質的に詳しく分析するために、6-gram 表現を例に取り上げ、具体的にどのような表現が使用されているかを分析した。その結果、英語母語話者は 14 エッセイ (全体の 18% 分散率 0.74) において 6-gram 表現を用いているものの、母語話者間で共通する 6-gram 表現はみられなかった。ところが、学習者は 51 エッセイ (全体の 41% 分散率 0.84) で 6-gram 表現が用いられ、かつ、“I would like to talk about” といった学習者間で共通の表現も多いことが分かった。

さらにこれらの学習者による 6-gram 表現を、学習者コーパス NICE に含まれている母語話者の添削文と比較した結果、上位 10 表現中 8 表現が母語話者による添削の対象となっていた。すなわち、学習者の使用する連語表現には誤用もしくは不自然な表現が多く含まれていることがデータにより明らかになった。

【招待講演】

コーパス検索で注意すべきこと —基礎データの信頼性向上のために—

大名 力 (名古屋大学)

コーパスを利用した研究では、大規模なコーパスをコンピュータで処理し、さらに統計的な処理も行われたため、そのようにして得られたコーパスデータは“客観的”で“信頼性が高い”と思われがちであるが、現実には、論文等で示された出現頻度をチェックしてみると、実際の頻度とは異なる場合も少なくなく、正しい数値で改めて検証してみると、主張が否定されてしまうケースさえある。定量的分析において出現頻度は研究の基盤を成す重要なデータであるが、論文等において誤った数値が提示されていても、そのことが問題とされることが少なく、また、そのような誤りを回避するための方法が議論されることもほとんどないのが現状である。

特別な知識や技術がなくてもコーパスが利用できるユーザーフレンドリーなツールの普及は、コーパス研究の促進に寄与してきたが、しかし同時に、コーパス、処理内容、手法・方法論のブラックボックス化を進める要因の 1 つにもなっている。ユーザーフレンドリーなツールを使用する場合でも、研究目的に合った正しいデータを得るには、コーパスやテキスト処理、統計処理に関する知識・技術が不可欠であるが、そのような知識・技術を学ばなくとも、(正しくなくても) 何らかの結果が容易に得られてしまうため、ユーザーフレンドリーなツールしか使っていないと、データの検証の必要性自体を意識しにくい。また、ミスというものは自分では気付きにくく、本人が注意さえすれば防げるというものではないため、具体的な問題点とその原因を明らかにし、それらの情報を研究者間で共有していくことが、

状況改善のためには重要であると思われる。

コーパスデータの信頼性向上のために検討すべきことはいろいろあるが、本講演では、そのうち、基礎データである出現頻度の算出に焦点を当て、具体例を挙げながら、コーパス検索やデータの分類・解釈において注意すべき点について説明したい。例として、サーチエンジンによる検索、Project Gutenberg などのプレーンテキストのファイル、Brown Family of Corpora、British National Corpus の処理などを取り上げ、データ形式、コーディング、検索式の例なども示しながら、実際の処理においてミスを犯しやすい箇所を指摘する予定である。

【シンポジウム】

進化する Web コーパス：現状と課題

最近 cloud computing といった用語も飛び交うほどインターネットをベースとしたコンピュータ利用形態が急速に進化している。そのような中、web 資源の活用は研究・教育の大きなテーマになってきており、コーパス言語学でもその影響は無視することはできない。海外の主要辞典出版社が自社内で web リソースを組み込んだ大規模コーパスを開発し、Sketch Engine に代表される商用 web コーパス検索サービスが、数十億語規模の web コーパスをネット上で簡単に利用できるような環境を提供するようになってきた。

本シンポジウムは、めざましく進化を続ける web コーパスの現状を把握し、英語コーパス研究における web コーパスの位置づけや役割、また問題点や課題などについて、web コーパスを積極的に研究・活用している諸氏を講師に招いて、学会員に有益な情報を提供するとともに、ご一緒に web コーパスの意義や活用法などに関して活発な議論を行いたいと思う。

まず、モデレーターの投野が web コーパスの過去 10 年くらいの動向をまとめながら、web コーパス構築の最新動向とその課題を概観する。続いて、田中氏に自然言語処理の分野から web コーパス研究に関連する言語情報処理技術の基盤や諸問題を論じていただく。大羽氏には具体的な web コーパスのテキスト特性に関してログデータを研究対象に論じていただく。また田中氏には工学系の専門的な処理技術を、大羽氏には個人レベルで web コーパス収集や後処理が可能なツール類の紹介もしていただきたい。最後に、実用面での事例として、小学館およびネットアドバンスの星野、中村両氏をお迎えして、web コーパスの技術を利用した大規模専門分野コーパス構築の試みをご紹介いただく。

Web コーパス概観

司 会 投野由紀夫（東京外国語大学）

はじめに、web コーパス研究の歴史的な概観として、過去 10 年程のコーパス言語学の分野における web 利用の変遷を見る。次に、英語コーパス研究に資する言語資源としての web コーパスの最新動向を紹介しつつ、講師の 4 氏の発表の位置づけとなる web コーパス技術（特に WaCky の活動）と応用の概観（Sketch Engine その他）と英語コーパス言語学の研究分野からの web コーパス利用の課題などに関して触れ、以下の 4 氏の発表への序論としたい。

Web コーパスの言語情報処理基盤

講 師 田中省作（立命館大学）

黎明期にはプログラミング技術などの特殊な知識が求められた web コーパス研究も、近年さまざまな要素技術が広く公開され、コーパス研究の一つとして身近なものとなりつつある。そこで本発表では、このような web コーパス研究に関わる言語情報処理とその諸問題を論じる。一般的に web コーパスの構築では、まずデータ収集・前処理（テキスト抽出・コード変換等）・テキストへの基本情報（作成日時・ソース等）の付与などを経るが、多くの場合この段階で既に、得られた文が well-formed ではない、言語

以外のデータが混入するといった初歩的ではあるものの煩雑な問題が起こり得る。具体的な研究段階となると、収集されたテキストが研究テーマに合致しない、テキストに適切な情報が与えられていないといった理由で、そのように構築した web コーパスを直接活用できないことも多い。また人手で、使用すべきテキストを峻別したり、収集すべきデータを制御したりしようにも、本来長所である web の巨大さや多様性が、逆に大きな障害となる。したがって、web コーパス研究では必然的にテーマに応じたより細かな言語情報処理が求められることとなる。本発表では、発表者が関わるプロジェクトを例に、以上のような問題と対応策を示しつつ、web コーパスの精緻な構築と活用に資するような今後の言語情報処理についても考えていきたい。

Web コーパス研究におけるブログの可能性とその文体的特徴

講師 大羽 良 (中央大学)

近年 web 上でのブログ (weblog) のジャンルおよび総数は極めて増加しており、大規模プロジェクト等の web データの自動収集の中にも無視できない割合でブログが含まれると考えられる。また各ブログサービスはコーパス構築・活用を可能にするツールを公開しているので、研究者個人がブログデータをもとに中規模以上のコーパスを作成することも容易である。このように web をコーパスとみなす研究においては好むと好まざるとにかかわらずブログデータに触れざるを得ない。

そこで本発表では均衡コーパスや書き言葉、話し言葉と語彙面・文法面で比較を行うことで、ブログを収集したデータがいかなる特徴を持つのか、特にブログコーパスが web 特有の特徴を持っているのかを調べた結果を紹介する。そもそもブログとは web 上のシステムでありジャンルではない。ブログに投稿されるジャンルは多岐に渡る。大量のデータを集めることで均衡したデータを収集可能であるとも考えられる。しかしそのデータはコーパス研究の均衡・代表性という概念に見合うものなのかといった問題に対しても論じられればと考えている。また、研究者個人レベルでのブログデータ収集・処理方法 (クローリングやスクレイピング・タグ付け等) も紹介する。

小学館 Web コーパス “Sekai Corpus” 構築とその活用

講師 中村隆宏 (ネットアドバンス SE)

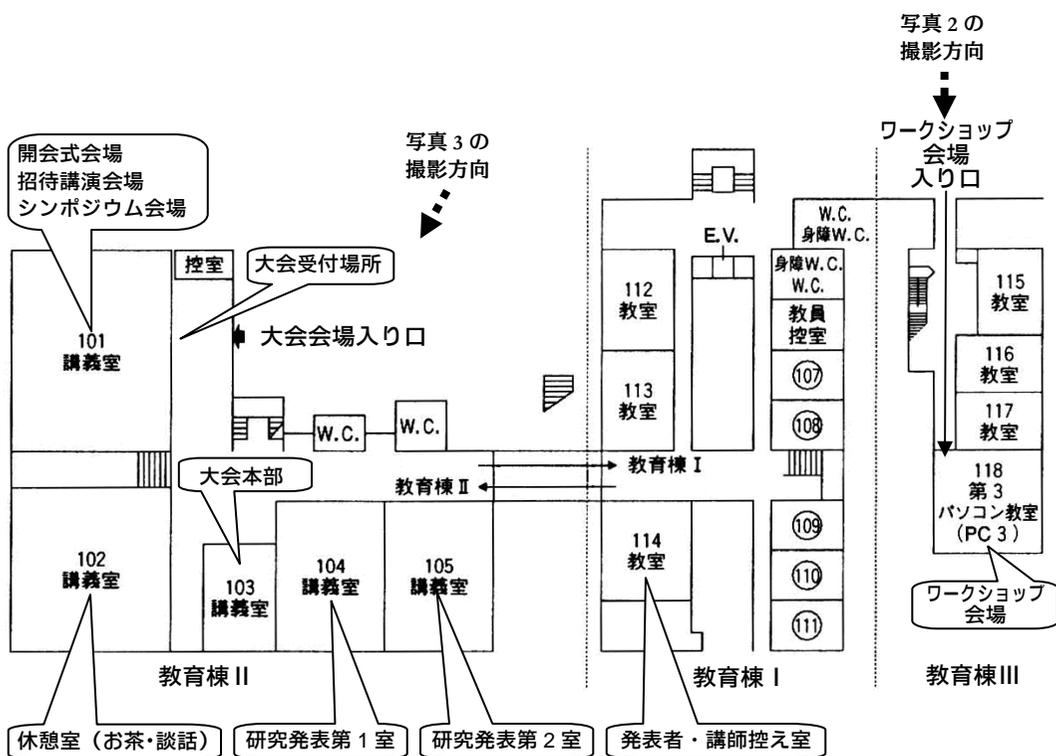
講師 星野 守 (小学館コミュニケーション編集局)

本発表では小学館およびその関連会社であるネットアドバンスが社内研究用リソースとして構築している web コーパス (仮称 Sekai Corpus) の概要を紹介する。弊社は 1990 年代の後半から、独自に大規模コーパスおよび辞書データの構築・検索技術を培ってきた。またその一部は Japan Knowledge や小学館コーパスネットワークとして一般利用できる形で提供されている。昨今の web コーパス構築環境の進歩に伴い、弊社でも British National Corpus, WordBanks Onlineなどを参照コーパスに、比較可能な大規模専門分野コーパスの自動生成という課題に取り組んできた。本発表では、独自に改良した web コーパス構築の手法の一部を紹介しながら、大量の専門分野コーパスの自動生成と小学館コーパス検索ソフト SAKURA への実装の実際を紹介する。さらに、それらの活用法の 1 つとして分野特徴語 (特徴表現) の振る舞いに関するサブコーパス同時比較インタフェース、その分析からみえる今後の web コーパスの活用法などに関して考察する。

《大会参加者へのご案内》

- ・ 自家用車での来場について：駐車場は台数が限られておりますので、車で来られる予定の方は事前に瀬良晴子先生（sera@econ.u-hyogo.ac.jp）までお問い合わせいただきますようお願いいたします。また、学園都市駅隣接のキャンパススクエア（http://www.campus-square.jp/）にも駐車場がございます。大学までは徒歩10分程度です。
- ・ ワークショップの受付：「教育棟 III PC3 教室」の前で午前9時30分から行います。
- ・ 大会の受付：「教育棟 II：101 教室前」で正午から行います。
- ・ 昼食について：土曜日のため大学食堂は休みで喫茶のみ営業していますが、収容人数は2,30名程度です。学園都市駅構内にパン屋とうどん屋、また駅を出て左手にマクドナルド、駅隣接のキャンパススクエア（http://www.campus-square.jp/）の本館と東館に飲食店が数軒ございますが、特にワークショップに参加される方は、後の休憩時間が限られておりますので、あらかじめコンビニなどで弁当を用意しておかれることをお勧めします。
- ・ 校内での喫煙について：敷地内全面禁煙で、喫煙場所も設けられておりません。禁煙にご協力いただきますようお願いいたします。
- ・ 当日会員について：会員でない方も、「当日会員」としてご参加いただけます（会費1,000円）。

会場案内図



※教育棟の号数の並び順にご注意下さい。上の図、左から、教育棟II、教育棟I、教育棟IIIとなります。

主な建物の写真



写真1: 兵庫県立大学正門。キャンパスは小高い丘の上にある。左側に神戸商科大学、右側に兵庫県立大学の石銘がある。



写真2: ワークショップ会場となる教育棟3の入り口。この廊下の突き当たりパソコン教室(PC3)がある。

写真3: 開会式会場、研究発表会場、招待講演会場、シンポジウム会場となる教育棟II。写真右側(木の向う側)が入り口となります。



写真4: 懇親会場となる大学会館。



キャンパスマップ



※正面からの坂は少しきついです。坂を登り切って左手の建物が研究棟Iの建物、右手が管理棟で玄関脇が保安室です。建物が分からない場合は保安室でお尋ね下さい。図は平面になっておりますが、階段が記入されていますように、丘の上であり、各棟の間は一階分の高低差があります。遠回りですがスロープもあり、バリア・フリーにはなってあります。



※学園都市駅からは

- 改札を出て右手へ、
- UNITY（高層ビル；<http://www.unity-kobe.jp/>）の吹き抜けを通り抜け、
- 駐車場と2階建の塾ビルの間を過ぎ、
- 信号を渡り、左へ、花壇（植え込み）の横を通り、
- 公団住宅と茶色い藤和のマンションの間の道を直進していただくと、県立大の正面（写真1）になります。
- 大学正門には左側に神戸商科大学、右側に兵庫県立大学の石銘があります。

※神戸市営地下鉄「学園都市駅」より徒歩約15分。

公共交通機関アクセスマップ

地下鉄周辺鉄道路線案内

ちかてつしゅうへんてつどうろせんあんない



※学園都市駅まで、神戸市営地下鉄「三宮駅」より23分、神戸市営地下鉄「新神戸駅」より25分。

2010年3月1日発行

編集・発行 英語コーパス学会

会長 赤野一郎

事務局 〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

徳島大学総合科学部 井上永幸研究室内

電話・ファックス：088-656-7125

email: naga.inoue@gmail.com

URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html>
